

「二」 名古屋大学・院で学んだこと

矢橋謝恩会と60年安保騒動

大垣北高校は県内有数の進学校である。しかし、昭和三十五年（1960）三月卒業した同期生三五六名のうち数十名が直ちに就職している。母子家庭の私は、その道も考えたが、三年次クラス担任の竹中照洗教諭などから、奨学金で何とかなると勧められた。また母にも、授業料の安い国立で自宅から通える大学ならばよいといわれ、にわか勉強で受験した。

幸い国立一期の名古屋大学に合格することができた。そこで、日本育英会と矢橋謝恩会に奨学金を申請したところ、両方から頂けることになった。前者は貸与（のち教職に就いて免除）だが、後者は全額給付である。

この矢橋謝恩会は、大垣赤坂で大理石商店を営む矢橋亮吉翁（一橋大学出身）が戦前に地元の人材を助けるため作られた。私も後輩を育成することこそが「謝恩」だと教えられた。

ただ、自宅から片道二時間余り電車を通い始めた大学は、いわゆる60年安保騒動の最中で、全学連系の自治会が連日ストを煽った。そのクラス討論で「安保改正は必要、スト・デモに

反対」と言った途端、オルグに取り巻かれ罵詈譎ばりざんぼうされたことがある。

家庭教師と医学史の資料収集

大学では四年間、アルバイトを続けた。家庭教師は週二回、個人塾の講師も週一回、通学の帰途、小学生から予備校生まで（主に高校生）合計十数人を教えたことになる。

また、学生の経営する組織「名大コンクール」で模擬試験の問題作成や通信添削も担当した。その国語主任は、一年先輩の田島毓堂いづみどう氏（のち名大教授）で、国語力を鍛えられた。

さらに、土日や春・秋には、近畿日本ツーリストの添乗員として各地へ出かけた。とくに中学や高校の修学旅行では、近畿・中国・四国・九州の名所を訪ねることが多く、後で専門の研究にも役立つている。

その上、最も有益なアルバイトは、三年次の春から始めた服部敏良としお博士の手伝いである。博士は開業医（一宮市山下病院長）の傍ら、日本医学史の研究を志し、すでに奈良・平安時代の本格的な医学史を出版され、引き続き中世に取り組もうとしておられた。

そこで、私は『明月記』『吾妻鏡』などから医事関係の記事を抜き書き、毎週持参すると、博士が藤原定家や北条政子の病状を診断される。そんな仕事を卒業後も十数年続け、鎌倉・

室町・江戸の各時代から近現代までの大著数冊（中日文化賞受賞）の作成を手伝った。

中村榮孝教授と彌永貞三助教授

当時の大学は、二年末までに一般教養（人文・社会・自然の三分野）と外国語（二言語）と体育（一種目）の単位を履修しないと、学部へ進むことができない。語学と体育の苦手な私は不安だったが、何とかパスして、旧制八高跡の教養部から旧八連隊跡の文学部へ通った（四年次から東山の新校舎に移転した）。

文学部の国史学科に進んだ同期生は男女十二名。講座の教官は、中村榮孝教授・彌永貞三助教授・藤村道生助手。他に非常勤の小島廣次講師などがおられた。そのうえ毎年、著名な大家（主に東大教授）の集中講義もあった。

主任の中村教授は、東大教授の坂本太郎博士と同期で、大著『日鮮関係史の研究』全三冊により日本学士院恩賜賞を受けられた。私どもにも、前近代の日本史は常にアジア史全体から考察するよう力説された。

また彌永助教授は、坂本先生の高弟で、古代史の政治文化も社会経済も手堅く考証する方法を、みずから論著で実践され、授業で懇切に教示された。

卒業論文は三善清行の伝記研究

学部で最も重要な卒業論文の指導教官は、彌永先生にお願いした。私は初め、仏教史に興味を持ち、虎関師鍊ニカンスレケンの著『元亨釈書ゲンコウシヤクショ』の成立史を考えたが、難しすぎて諦めた。ついで、今も「天神さん」として親しまれる菅原道真の政治的役割を解明したいと考えた。

しかるに、三年次の昭和三十七年暮、坂本太郎博士著『菅原道真』(吉川弘文館人物叢書)が出版され、また彌永先生も道真関係の精緻な論文を書いておられた。そこで、あらためて道真のライバルとされる文人官吏の三善清行ミヤシキヨユキに注目し、その生涯と作品の研究に取り組んだ。

この卒論は、大学院修了後、徹底的に調べ直し、学術誌に順次論文として発表した。その抜刷数篇を坂本博士に送ったところ、まもなく人物叢書の一冊に推薦した、との御手紙を頂いた。あの感激は今も忘れられない。それから一年近く全力で書き下ろし、昭和四十五年九月刊行されたのが、私の第一作『三善清行』である。

修士論文は国司制度の実態研究

元に戻って、東京オリンピック開催間近の昭和三十九年春、学部を卒業することになる私

は、高校の教職に就くため、岐阜県の採用試験を受け合格していた。ところが、卒論提出後、藤村助手を通じて、大学院を受けてみないかと勧められた。

そこで、暫く迷ったが、実は学部三年のとき、千代田化工建設の懸賞論文「私の大望」に応募して入選、その奨学金もいただいていた。それが大学院でも続けて支給されると判り、ほとんど準備なしで受験して、何とか合格することができた。

しかし、修士課程の二年間、後述の田中卓先生に憧れて、皇學館大学の古代史演習を受け、また皇學館高校の非常勤講師（歴史地理）も務めた。そのために、毎週、岐阜と名古屋と伊勢を駆け廻っていた。

そんな状態では、肝心の研究に専念できず、修士論文は杜撰ずさんなものしか書けなかった。その要旨は、三善清行が「意見十二箇条」などで改革を求めている国司制度が、大宝令制から奈良・平安時代にどのような変質をとげたか、畿内と周辺の合計十国を中心に、その実態を具体的に検証したものである。